

「確かな作文力」を育てる指導法の研究

埼玉大学大学院（埼玉県川越市立山田小学校）

岩井 信 康

○作文を書くのが苦手という児童は、「書くことが見つからない」「作文の書き方がわからない」等の理由で作文を嫌がる。児童が「書くことが見つからない」というのは、書くことが何もないのではなく、事物を捉える観点がわからないからだと考えられる。「作文の書き方がわからない」というのは、作文の書き方の系統的な指導法が指導者側に確立していないのが主な原因と考えられる。「そして、そして」「それから、それから」等の接続詞を続けて書く作文や時間の順序を追っている作文などがよい例である。

○作文指導の時、困る理由として「物の見方や考え方の指導」「作文の評価」を挙げる教師が多い。「物の見方や考え方の指導」は、認識力を育てることである。作文を書くことによって自分の考えが整理され新しい事に気がついていく。このような過程が、認識力を深めるといわれている。だが、認識とは「物の見方・考え方」と片付けられてしまわれ、どのように指導したらよいか明確ではない。「作文の評価」では、児童の作文を教師が赤ペンで添削し、内容に関するたくさんコメントを書くような指導をしているのを目にするが、指導が次の作文の時間に活かされているかどうかは疑わしい。書き方に関する評価であれば、次の作文に活かせる。しかし、内容に関する評価だと指導の継続性がないため児童が、次の作文の時間に活かすことが難しい。以上の点を考慮にいれながら、「確かな作文力」とは、事物を捉える観点が明確で、自分の考えの筋道を文章構成の段階を追いながら一つずつ示していく能力と定義してみた。

○本発表では、認識力の育成という観点を取り入れながら「確かな作文力」を育てる指導法の実践例を提示する。作文教育における認識については、生活綴方の国分一太郎氏が実践を通して研究を進め日本の作文教育に大きな影響を与えた。生活綴方の認識には、「自然や社会の事物について正しく豊かな見方・考え方・感じ方を養うことと、物事の本質をつかんでいくために役に立つような物の見方・考え方・感じ方である」というのがある。国分氏は、前者を感性的認識とし、後者を理性的認識として、認識の過程は感性的認識から始まり理性的認識へと進むとしている。だが、小川太郎氏は生活綴方では、理性的認識までいくにはある飛躍が必要としている。つまり、生活綴方では確かな理性的認識まで子供の認識力を育成できなかったと考えられる。おそらく、生活綴方では感性的認識からどのように理性的認識を導き出すかという技術が不明確だったのである。

○本研究では、感性的認識と理性的認識の関係を明確にし、どのようにしたら、感性的認識から理性的認識を導き出せるのかという指導技術を提案していきたいと考える。また、事物を捉える観点を育成することによって「確かな作文力」も育っていくものと考えている。